ハイキュー!! ?浪速 夏の陣

紅乃 晴@小説アカ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全国三大エースの内の一人である牛島若利。

彼が高校一年生の時に目にした強烈な一打を放つスパイカー。

浪速のバレー馬鹿と、烏達による一夏の陣が始まる!!

目次

・プロローグ　怪童の追憶 ―― 1
第一話　浪速の迷子 ―― 5
第二話　境目の群雄割拠 ―― 15
第３話　たった二人のバレーボール ―― 25
第４話　なにわに降り立つ鴉達 ―― 32
第５話　とある高校最強セッターとの因縁 ―― 40

・プロローグ　怪童の追憶

目の前に聳える、高い高い壁。
あの日の出来事を、俺は鮮明に覚えている。

高校生になって、初となる全国大会。
白鳥沢学園に入学した俺にとって、全国という言葉にあまり特別な感情を抱くことはなかった。
中学生の時も、強豪校であった母校の名を背負って全国に出たこともあった。
その言葉は高校生になっても変わらない。
強いものが勝ち残り全国にいく。
ただそれだけだ。
だが、あの時に。
あの瞬間に。
俺は全国という言葉の〝高さ〟を思い知らされることになった。

全国高等学校総合体育大会バレーボール競技大会。
夏の全国と呼ばれる大会の一回戦目。
俺は一年生ながらスターティングメンバーとして抜擢され、ウイングスパイカーとしてコートに立った。
あぁ、いつもと変わらない。
高い天井とオレンジコート。

試合独特のキレのある空気感と緊張感。
体はつつがなく、硬さや緊張もない。
間違いなくベストコンディション。

試合は1セット目中盤。
白鳥沢学園の優勢。

相手のコート内で高くあがったトス。
前衛にいた選手は、トスがスパイカーの手に収まるタイミングを見計らって飛んだ。
シューズがコートを力強く蹴る音。
撃ち抜かれる破裂するのような音。
矢継ぎ早に響く音が、鮮明に記憶に残る。
緩やかな回転がかかったトスから一変し、強力な回転と打撃で打ち出されたボールは、捉えていた選手のブロックを吹き飛ばし、打球の勢いが死なないまま飛んできた。

まさに一瞬だった。

ブロックされ、相手コートに叩き落とされる確信があったボールが、瞬間移動をしたかのように目の前に現れたのだ。
咄嗟にアンダーで受けようとしたが、打球の力は計り知れず、ボールは手に弾かれ、はるか自分の後ろへと飛んでいく。
そのボールは確かにブロックをした選手の手に当たってから飛んできてはずなのに、まるで目の前で打ち出されたかのような威力があった。
ビリビリと腕が震える。
骨に衝撃がずっしりと伝わったような錯覚さえあった。

ハッと目を向ける。

そこにはスパイクを決めて着地した相手選手がいた。
その目を見て久しく忘れていた気持ちを思い出す。
目が語るのだ。
そのスパイクがどれほどの研鑽と技と力で作り上げられているのかを。
ブロックの手を物ともせず、捉えられない絶対的な力。

その時からだろうか。

今まで満遍なく力をつけてきた技術の中で、スパイクにこだわるようになっていったのは。
試合は結局、2セット先取の勝利で終わった。あの瞬間に飛んできたスパイクは、もう打ち出されることはなかった。
彼は飛ぶことすらできなかった。
弱小チームだと誰もが思うだろう。
だが試合が終わった時、あのスパイクを相手にしなくていいと俺は心の中で安堵した。
安堵した自分に驚いてしまった。
怪童と呼ばれ、全国最大エースと呼ばれる今、その安堵と驚愕は記憶に残っている。

試合後の握手の感触も。
そして、相手の底知れない眼光も全て。

それから全国。
戦いの舞台に立つたびにこびりつく記憶との決着を付けるべく俺は待ち続けた。
俺と同じ歳で、俺をはるかに凌駕するスパイクを放った選手を。
しかし最後の大会でも、彼は姿を見せることはなかった。
聞いた話では、あの試合を最後に学校側の都合でバレー部は廃部になったと聞く。
心のどこかで信じていたのかも知れない。
あれほどの力を持つ者だからこそ、どこかでバレーを続けているのかも知れないと。
故にあいまみえる事を夢見ている。
磨き上げたこのスパイクで今度は俺が奴を撃ち抜く。捉えきれない絶対的な〝力〟で、必ず勝つ。

俺はここまできたぞ。
お前は今、どこで何をしている。

大阪府代表、敷島工業高等学校。
――難波　陣（なんば　じん）。

ハイキュー‼？
大阪　夏の陣

第一話　浪速の迷子

高校生、最初の秋。

「日向、はしゃぎすぎだボゲェ」

母校である烏野高校からバスと電車を乗り継いで。私たちは仙台へとやってきていました。

「うっせーな、影山ぁ！買い出しとか新鮮だろ!?」

一年生組の中で、一番元気がある日向が先頭に立ちながら、後ろで影山くんが怒る光景はもう見慣れたような気がします。

「確かに実用品って清水先輩か、武田先生が揃えてくれてたからね」

今日、私たちが仙台まで出向いたのはバレー用品の買い出しだ。普段なら学校が契約している業者から清水先輩から武田先生を介して注文がいくのだけれど、今回は特別。

なんと、仙台市民ホールでバレーメーカーの即売があるのだ。ミカサやモルテン、バレーをやってる人なら一度は聞いたことがあるメーカーが出店していて、相場よりも破格の値段でバレー用品を売り出しているのだ。

一年生組に言い渡されたのは、ボールと各種用品を必ず押さえると言うミッション。清水先輩から預かった部費は、私のカバンの中で厳重に管理されている。

ああ、誰かスパイにでも取られたらどうしよう…お腹が痛くなってきた。

「それにしてもはしゃぎすぎデショ。散歩に行く犬じゃあるまいし」

後ろで、山口くんと歩く月島くんがいつもの煽り気味の口調でそう言った。夏の合宿と秋の高校バレーを経て、月島くんは変わったように思えるけど、日向達に対する煽りは変わらないご様子で。

「なんだとぉ月島！」
「まぁまぁ日向、落ち着いて」

売り言葉に買い言葉で振り返った日向。それを嘲笑う月島くん。間に入った山口くんの静止で声を荒げた日向も勢いをおさめた時。

「だぁーっ!!わからへん!!」

肌寒くなり始めた仙台駅で、大声が響き渡った。
え、なに？戦争!?戦争が始まったんですか!?
とっさに身を固くして辺りを見ると、仙台駅の前にある大きなエリアマップの前で、二人の高校生が頭を抱えている様子が見えた。

「そない言うても、スマホ忘れたお前のせいやろ？」
「未だにガラケー使うてるお前に言われたないわ！ガラパゴスか!?進化過程で置き去りにされんか!?」
「うっさいわダボ！ガラパゴス諸島は生命の神秘の島なんですー！俺はスマホのタンタン画面叩くのが苦手なんや！なんやねん、画面叩くって！アホか！割れるわ！」
「指圧強すぎやろ。機械仕掛けかいな」
「せや、俺が浪速のサイボーグってなんでやねん!!」

何でしょうか…あのやりとりは…。

「なにアレ」

私の心中を察したように、月島くんが呆れ口調で呟く。山口くんは驚いた顔で見つめていて、影山くんは興味なさげな目をしていた。

「め、めめめ…目を合わせたらダメだよ。巻き込まれるよ…戦争に…」

うわぁあ…ああいう感じの人、苦手だ。

ブワワと冷や汗が出る。

大丈夫、大丈夫。声をかけなければ害はない。蜂と一緒だ。こちらから仕掛けなければ何の問題もない。息を吐いて、吸って、ヒッヒッフー…あ、これ違うやつだ。

あれ？そう言えば、普段騒がしい日向が静かだ。……静か？

「ねぇーなにやってんのー？」

ハッと目を向けると、そこには怒涛のマシンガントークを繰り広げていた二人に話しかける日向の姿が!?

ひぇっ！話しかけてる!?

「日向ボゲェ!!」

「お前はコミュ力お化けか!!」

思わず影山くんが罵倒し、山口くんが悲鳴のような声を上げた。こちらの戸惑いなど、どこ吹く風で日向は随分と背が高い二人のうちの一人から見下ろされた。

「ん？なんやちんちくりん、中学生かいな」

「失礼な！ちゃんと高校生だ！」

「あっはっは、そりゃすまんかった」

そう言いつつも日向の頭をワシワシと撫でる辺り、かはり肝が座ってるのだろうか、不満そうに手を払う日向を面白がっているようにも見えた。隣いるお連れ様が、疲れたような顔をして親指まで後ろにあるマップを指差す。

「こいつが場所メモしたスマホ、ホテルに忘れてな。行き方どころか会場すらわからんのや」
「ホテルってどこですか？市内なら引き返したほうが」
「残念ながら、神奈川のホテルやな」
「神奈川!?神奈川県!?シティーボーイですか!?」
「日向、田中先輩達の影響受けすぎ…」

随分と遠くから来てらっしゃるようで…。日向がキラキラした目で言う様子を見て、山口くんは賑やかな二年の先輩を思い出している様子だ。「先輩だからな!!ガーッハッハッハ！」と笑う田中先輩達のイメージが簡単にできてしまう…。

「なんやようわからんけど、俺ら大阪から東京に修学旅行の途中で抜け出してな」
「修学旅行!?やっべ…3年生だ…生意気な口聞いてすんませんした！」

咄嗟に頭を下げる日向。慌てて口調も直しているが、二人は特に気にしないで頭を下げた日向に笑いかけた。

「おもろい奴やな！俺らは2年や。ウチの学校は3年は就活忙しいから、修学旅行が2年にあんねん」
「それで抜け出してきたんですか？」

影山くんの問いかけに、二人はしてやったりな笑みで頷く。

「おうよ！東京駅から大阪に戻る時に先生の目を盗んで東北新幹線に飛び乗ったんや。この日のために我慢して貯めた小遣いや貯金の大枚を叩いたんやからな！んなははは!!」
「いらんこと言わんでいいねん、ハルゥ！口滑らしたら…」

そう言った矢先、二人の方から携帯音が鳴り響く。おそらく着信なのだろうが、さっきまで豪快に笑っていた二人の表情がみるみる固くなっていき、汗もダラダラと流れていた。

「ほらぁ！きた!!ハル！お前責任持って出や!?」
「うそやろ…かぁーー…しゃあない」

ハルと呼ばれた方が意を決してポケットから携帯を取り出す。
「あ、同じやつだ」と呟く日向。折り畳み式の携帯を開くと、ぶるぶると震える応答ボタンを押して、耳へと押し付けた。

「うっす!!すいません！仙石っす!!」

直立不動。携帯電話からは、かなり離れているはずなのに大きな怒声が聞こえた。なにを言ってるのかはわからないけれど、果てしなく怒っていると言うことはたしかにわかる声だった。

「今どこにいるですか!!仙台っす!!しゃす!!」

ひぇ、その言葉で怒声がさらに大きくなったんですけど!?返事をハキハキとする相方を、もう片方が軽く頭を叩いた。

「返事良いだけやめーやアホタレ!!」

ノリが完全に漫才師のそれだ。月島くんはやりとりを冷めた目で見つめている。というより、反応しようがないと言った様子だった。

「あーすんません！東北だから電波がー!!ブー!!ブー!!」

口を尖らせて声を上げると、耳元から離した携帯を折り畳む。電源落としたから大丈夫！とこちらにVサインを送るけれど、一体なにが大丈夫なのでしょうか、私にはわかりません。

「お前、東北の人ら目の前にしてよう言えるわ。感心せんけど」
「うっさいわ。もう引き返しても、ぶっ殺されるか、しばき倒されるかのどっちかやしええやん。知らんけど」
（よくないと思いますけど…）
（知らないんだ…）

山口くんと私の心情は限りなく近いだろう。なんとなくそう思う。というより、修学旅行を抜け出して仙台まで来てるのだから、二人は余程の問題児…いや、不良なの？喧嘩!?警察!!警察呼ばなきゃ!!

「で、二人はどこに行くんですか？」

パニック寸前になってる私を置いておいて、日向が出した問いかけに、二人は顔を見合わせて答えた。

「ミカサとモルテンの即売会」
「え、バレーやるんですか!?」
「ポジションはどこですか!?」

言葉を聞くや、日向と影山くんがぐっと前のめりになって問い詰める様子で突っ込んでゆく。二人はバレーになると周りが見えなくなるというか、猪突猛進というか、ブレーキが無くなるというか。

「ウ、ウイングスパイカー」

「俺はリベロや」

さらに質問責めにしようとする二人に、やめなさいと、山口くんが詰め寄る日向たちの首根っこを掴んで引き剥がす。こう言う時の山口くんは頼り甲斐が出るんだよなぁ。

「大阪のバレーかぁー！どんなのだろうな！」

「お二人の学校は？」

大阪のバレーを想像する日向。二人の学校を聞いた影山くんだったが、その質問を聞いた二人が、どこか辛そうな表情をしていようにに私には見えた。

「まぁ、ええやないか！そう言う反応するっちゅーことは、そちらさんは全員？」

「バレー部です！烏野高校の!!」

元気よく答える日向。その言葉を聞いて、二人は表情を変える。どこか空気が鋭くなったように思えるほど、雰囲気が変わったのだ。

「烏野…」

「高校…」

「知ってますか!?おー！ついに俺たちの名前も全国クラスに!?」

「いや、知らん」

思わせぶりな態度に、思わずズッコける。悪いなノリが良くて、と日向の肩を叩いて豪快に笑う。

「けど、強そうやな。お前ら。ビシビシ感じるわ」

その言葉に、日向達は表情を真剣なものに変えた。相手も一緒だっ

たからだ。相手が判るように、日向達もわかった。目の前で騒がしく、漫才のような会話をする二人とまた、かなり強い選手であると言う事を。

「お前、そう言うとこの感だけは良いんだよな。レシーブ下手くそだけど」
「うっさいわい」

へらへらと笑いながら言う相方にツッコミを入れるように返す。その様子は、イメージは違うがどこか西谷先輩のような心強さが感じられた。

「よかったら一緒に行きませんか？俺たちもそこに買い出しに行くので」
「ほんまか!?いやぁー、まさに地獄に仏とはこのことやで!!俺、仏さんなんて見たことないから知らんけど！」
「知らんのかい。ベリケンさんでも想像しとれ」

山口くんの提案に感謝する二人。大阪の仏様といえば…府外にはなるけれど、奈良の大仏とかだろうか。

（菩薩顔…）

ふと、田中先輩と西谷先輩の菩薩顔が頭をよぎる。

「俺、日向翔陽です！こっちは影山!!こいつは山口で、このいけすかない眼鏡は月島です」
「うるさいよ」
「この子は谷地さん！ウチのマネージャー!!」

目を向けられて咄嗟に顔が強張る。と、とりあえず挨拶をしなけれ

ば!!

「ど、どうも!よろしくお願いシャス!」

思いっきり噛んだー!!内心でのたうち回る。二人は全員と握手をしてから全員を見渡す。

「俺は難波　陣（なんば　じん）。こいつは仙石」
「仙石　晴海（せんごく　はるみ）や。年上扱いとかめんどいから、気軽にハルちゃんって呼んでくれてええで!」
「ちゃん付け自分でするとかアホちゃうか」
「んじゃとぉ!?アホ言う方がアホなんじゃい!」

じ、自己紹介でも漫才をしてらっしゃる。止めることのできないノリとボケの掛け合いに言葉を失う。影山くんと日向は慣れた様子で二人を目的地へと案内し始めている。やっぱり日向はコミュ力お化けだ。

「なんか、賑やかな人たちだね」
「…僕、苦手かも」

山口くんの言葉に、月島くんは答える。けれど、それは嫌な感じというより、どこか警戒しているような印象だった。

「ツッキーは静かだもんね」
「うるさいよ、山口」
「ごめん、ツッキー」

随分な寄り道となったが、私たちと難波さんたちを加えた一行は、無事に即売会の会場へと辿り着いた。まぁ、そこには他校の買い出し要員もいるわけであって…。

「あー！らっきょヘッド!!」
「伊達工もいるぞ!?」

用品の争奪戦が始まったのは、まぁ仕方のないことだった。
日向達が取り合ってる最中、するりと抜けるように目的の品物をゲットした難波さん達はさっさと宅配手配のコーナーへと向かっていく。大阪の人ってこういう感じの空気に強いのだろうか…。
猛者達が荒れ狂う怒涛の即売会。
結果、先輩達から言われていた用品を確保した私たちは、難波さん達を送るために再び仙台駅へとやってきていた。

「おおきにな、日向。この礼は必ずする」

別れ際に言った難波さんの言葉。
私はどこか、ありふれた言葉だと思っていた。

けれど、その言葉の意味を知ったのは、私たちが二年になった後だった。

第二話　境目の群雄割拠

兵庫県、尼崎。

駅から程近い市民ホールの一角は、夜になれば契約している社会人のバレーチームが独占することになる。

チームとしては、烏野町内会チームのような高校時代バレー経験者が集まると言ったアマチュアバレーだが、ここは大阪と兵庫の境目。

関西の強豪校が軒を連ねる中で、立地が混在する一頭地。

もちろん、高校バレーを終え、懐かしき青春の詰まった母校の体育館を使えなくなった三年生も、疼く身体とバレー熱を解消するために社会人チームへと参加するわけであって…。

「北ぁ！」

２対２。

ボールを拾い、トスを上げ、スパイクで返す。

粗末でも、不恰好でも、３回ボールを触って相手コートに返す仕事を２人でやらなければならない練習形式は、普段ポジションに縛られている選手をよりアグレッシブな環境へと引っ張ってくれるものだった。

稲荷崎高校から卒業したチームキャプテンの北信介、コートキャプテンだった尾白アラン。

高校卒業後、北は農家、アランは大学と、それぞれの進路は違ったがバレーは続けていた。

アランはもともと大学の練習があったのだが、使用している体育館

の整備のため手が空いたところ、北が通っている尼崎のバレーチームの練習に誘われたのだった。
アランは、腕がもげそうなスパイクを不恰好ながらあげる。
汗が滲む。
腕が痺れる。
骨が軋むような感覚が腕に残る。
…アランにとって、最初は疑問だった。というより不満だった。
同期である北の誘いとはいえ、ここはアマチュアバレーチームだと心のどこかで見下していた。
いくら強いとはいえ、仲良しこよしでやっているチームなんてアランには何の魅力も感じられなかった。
できることなら、宮ツインズがいてくれれば楽しめはするだろうが、とも思った。
だが、そんな慢心はコートに立った時に消し飛んだ。

「チャンスボールだぞ!!」

アランが疎かにあげたボールは北へと帰らず、相手コートへと入った。
心の中で舌打ちをした瞬間、目の前に大きな影が飛び込んでくる。
綺麗な姿勢、高いジャンプ、まるで空中に止まっているかのようにも見える。

「…陣!!」

体勢から弓を弦いっぱいに大きく引き絞った相手は、味方の声を受けて一閃を放った。強烈な破裂音と共に打ち出されたボールは、北の堅牢なアンダーを崩し、後ろへと吹き飛んでゆく。

「いっ……つも、強烈やなぁ!!」

北は冷や汗を流しながら、着地する相手チームのスパイカーを見据える。
アランも同じ心境だった。
高校、そして大学に入っても多くのパワースパイクを撃ち放つスパイカーは見てきたが、目の前にいる相手はその誰よりも強く、そして魅了する力を持っているように思えた。
北がアランを誘った理由。
それは尼崎で二人がバレーチームに参加しているからだった。

スパイカー、難波　陣。
レシーバー、仙石　晴海。

全国区では無名。
だが、関西では別物だ。
高校生時代。彼らは母校の部活には参加せず、ずっと社会人のいるアマチュアバレーチームで青春を過ごしたのだ。
大人と共に、体格が違う者と共に、経験が違う者たちと共に。
普通なら、その影に消えてしまいそうだが、彼らは社会人チームの中でより一層輝いて見えた。
高校も卒業していない若輩者。
社会人選手に劣る経験。
陰で噂されるその全てを、力と実力でねじ伏せる圧倒的な強さ。
たった二人という異彩。
多くのチームがある関西区で、陣のスパイクをブロックで止められる者が何人いるのか？仙石のレシーブに捕まらないスパイカーがいるのか？
少なくとも、高校時代から二人を知り、卒業後にこのチームで共に過ごしてきた北は、陣のスパイクがブロックに止められた瞬間、仙石が捉えたスパイクが手からこぼれ落ちた瞬間を見たことがなかった。
相手からのサーブ。
コート際を狙うボールは山なりにアランの前に落ちる。サーブか

らのレシーブで何回、崩されたことか。アランはすぐに反応し、一歩でも早く、サーブボールが落ちる落下地点へ届く射程範囲へと入る。

「北っ！」

アンダーでボールをすくい、高くあげる。

今度は自分のコートの中だ。高くあがったボールを見上げて、北がトスの体制に入った。

後ろへ下がり、十分な助走距離を確保する。

しっかりしたジャンプ、しっかりした姿勢、引き絞った手を意識して、アランはコートめがけて走り出す。

「アラン!!」

軽く触れるような音共に、北に落ちたボールがアランの打点へと伸びる。

ああ、いいボールだ。

振りかぶった姿勢のまま、相手コートのどこに落とすか、クロス方向へと狙いを定めた瞬間。

「視線、腕の振り!!雑っ!!」

もうそこには、アンダーでもトスでも対応できる体制を万全に整えた仙石がいた。

殺される…!!

本能と理性が同時に鳴らした警鐘。それに反応したアランの手は、打点をややずらして仙石のいるクロスからストレートへと軌道を無理やりずらした。

だが、正面にはネット側で待ち構えていた陣のブロックが立ち塞がる。

完璧とは言い難いが十分な威力で撃ち放ったアランのボールが、陣

の手に触れて一気に失速する。

「くっそぉ…がぁ!!」

「ワンタッチ！仙石ぅ!!」

陣の指に触れて軌跡が上向きになった一打を、仙石がシューズを切り返して一気に取りに行く。落下位置の下に潜り込んだ仙石は飛び上がってトスの姿勢へ。

北もアランも、そして助走準備を整えた陣もトスがネット側へと上がると思っていた。

「まかされぇ!!」

ボールが仙石のトス構えの手に落ちようとした刹那、腰を入れた一打が響く。

北とアランが気がつき、振り返る。

仙石が放ったボールは、鋭いラインを描いて自分たちの後ろへと叩きつけられていた。

「はぁーーー!?」

思わずアランがムカついたような表情で声を荒げた。

仙石のポジションはリベロ。しかし、攻撃が苦手というわけではない。攻撃ができないというわけでもない。

というより、リベロだけでは足りないのだ。何もかもが足りない。六人でやるはずのバレーを、陣とたった二人でしていく中で、ポジションひとつ程度で満足していては足りない。

仙石は、陣にトスを上げると直前まで構え、ボールが理想的な位置へと降りてきた瞬間に、スパイクへと切り替えたのだ。

なんて奴だ。

アランがそう思ったのは、白鳥沢の牛島くらいだった。化け物クラ

スのエース。理屈も知性も力でねじ伏せる怪物。
それが目の前に二人もいる。

…戦慄する。アランはさっきまで彼らチームを見下していた自分を恥じる。
腰と腕の振りだけで撃ち放たれたスパイク。それはトスが上がると〝思い込んでいた〟北とアランに気づかれることなく、コートへと落ちたのだった。

「おいゴラァ！仙石ぅ!!なんで打ったんや!!上げろやアホタレ!!」
「はぁー!?こういうのは使い所なんですぅー!!単細胞なお前より、俺の方が考えてるんですゥー!!」
「なんやとぉ!?もういっぺん言ってみぃ!!」

1ゲーム目、16—25。
2ゲーム目、14—25。
マッチポイントを制し、2ゲームストレート勝ちをしたというのに喧嘩かいな。
翻弄されるとはこう言うことか、と流れる汗と共に疲労感が抜けない呼吸を吐きながら、そんなことを考えているアランは、ネットの向こう側で喧嘩を始めた陣と仙石を見つめる。
北が差し出してくれたタオルを受け取り、汗を拭う。
まさに圧倒的だった。
今になって相手の実力を思い知る。
スパイカーも、そしてリベロも完成度が高い上に、そのポジションにこだわることなく、ボールを上げ、ボールを渡し、ボールを放つ。
変幻自在。
たった二人だというのに、安定感が1チームレベルだった。まるで二人だけで、真っ黒な鴉が舞う、あの試合に挑んでいるような気分

だった。

「あの二人、相手にすると思い出すわ。宮ツインズ」

北はどうやら、手がかかる後輩を思い出していたらしい。

休憩後、ローテで回して2対2を申し出てきた陣たちに付き合う二人。

北にも、そして期待をしていなかったアランにも、とても有意義なバレーの時間が、そこにはあったのだった。

▼

「相変わらず…無茶苦茶な動きやな」

あれから数セットの2対2を繰り返した北とアランは、体育館の隅に腰を下ろしていた。まるで濃厚な試合をやったような疲労感が二人の体にずっしりとのし掛かっている。

それほどのプレッシャーを、たった二人でしか戦えない「2対2」で与え続けれることが異常とも思えてならない。

「北さん！お疲れ様っした！」

「尾白さんも！」

ドタドタと走りながら座り込む二人の元へやってきた陣と仙石。滝のような汗の量は北たちと変わりはないが、その顔に疲労感はない。まだまだピンピンしてると言ったほうが正しいなとアランは元気いっぱいな二人を見て思う。

「アランでええよ…尾白さんなんてゾワゾワする。二人は北さんとは何度か練習してるんやろ？」
「はい、まぁたまに会う程度でしたけど」
「ちなみに最初に遭遇したの宮ツインズやからな」

そもそも、北が練習不足と言って不完全燃焼な二人をここに連れてきたのがきっかけであった。
社会人チームとやり合えるなんて、とはしゃぐ二人が陣と仙石を見た瞬間に今まで見たことない黙り具合を見せたのは今でも語り草である。

「2対2やったあと…「あいつらとは2度とやらん!!」って見たことない顔で言ってたわ」
「あの二人がそこまで言うんか…」
「宮兄弟とは中学のチームで何回か当たったことあって、その度に「俺の完璧なトスあげてんのに何で勝たれへんのや」って試合後に毎回アツムがブチギレしてたもんな」
「アイツの綺麗なトスを叩き落とすの超楽しかったのにな。高校入った途端、さっぱり試合もできへんくなったし」

わっはっは、と快活に笑う二人。
事実、中学生時代に宮兄弟が所属するチームと何度か戦っている。
その頃の侑のトスは本人曰く「お行儀がいい」トス回しだったらしく、陣と仙石の連携という名の壁の前に尽く潰されたとか。

（そりゃトラウマガンガンに植え付けてくる相手と好んで2対2なんてやりたくはないわな…）
（いや、宮城の烏野変人コンビならあるいは）

アランの内心とは裏腹に、宮兄弟に食らいついて離さなかった宮城

の烏野一年コンビを思い出す北。もし、この場にあの二人がいたら、間違いなくエンドレスで2対2を続行していただろう。

「にしても、勿体無いなぁ…二人の実力があれば全国だって夢じゃないやろうに」

北の言葉に、朗らかだった陣の表情が強張った。アランも耳にしたことがある。二人がなぜ、高校生バレーの道ではなく、社会人チームでの経験と研鑽の道を選んだ理由を。

「〝敷島工業〟のことは残念やったけど…もっと他の高校に行くとか」

「北さん」

仙石からの、その一声に北とアランは異様な感覚を覚えた。二人を改めて見る。そこには後悔も残念さも、ましてや悲しさやなんてものは存在しない。

そこにはただ陣と仙石、その二人が積み上げてきた覚悟だけがあった。

「俺らの高校バレーは、あの日のあの瞬間に終わったんです」

その言葉を最後に、北とアランは何も言えなかった。自分たちよりも一年下。彼らは今高校三年生だ。だが、歩んできた道は自分たちの何倍、何十倍とも重い。

彼らが、高校一年の夏の段階で〝高校バレー〟という舞台から去ったことが何よりも悔やまれる。

「そっか…なら、他に言うことは無いわ」

「難波ぁ！仙石！こっちで試合出てくれ！人手足りんのや！」

社会人チームのコーチに呼ばれた二人。纏っていた名状し難いオーラを飛散させ、コーチへ手を振って陣は答えた。

「はーい！じゃ、北さん、アランさん。今日はありがとうございました」

あれほど2対2をやっておいて疲労を微塵も感じさせない足取りで社会人チームに混じっていく二人の後ろ姿を見つめる。

「…ほんま、勿体無いわ」

「だな。なにせ…あの怪童、牛島が唯一競り負けた相手なんやからな」

二人のその呟きは、この体育館にいる誰にも聞こえることはなかった。

第3話　たった二人のバレーボール

俺こと仙石　晴海が、あいつと出会ったのは、小学3年の頃やった。

「よろしくお願いします」

ふてこい顔してチームメイトに挨拶してきた難波　陣の顔を俺は今でもよく覚えとる。

小学生のバレーチームにたった一人で入会しにきたときは「なんやろ、変な奴」ってガキながら思ってたわ。

難波　陣。

アイツの親は、地元じゃ有名なバトミントンのプロプレイヤーでな。

バトミントン押し付けられるのが嫌すぎて、代わりにバレーを選んだんやと。

笑えるくらいしょうもない理由やったわ

けど、その笑える理由がアイツにはドンピシャりとハマった。

1年後には頭角を表し始めて、小高学年で身長は175。子供ん頃から嫌々やらされてたバトミントンで付いていた筋肉が役に立ったって言う訳や。

「仙石!!」

「お前いつも無茶言うなやクソがぁっ!!」

俺はアイツに振り回されて、気がつけば中学でも同じバレーチーム

に所属。地区では負けなしと言われて、いっときは雑誌の取材まで来たくらいやった。

「なぁ、ハル！俺は敷島工業に行く!!公立で全国レベルなのはあそこしかないで!!」

「うっさいなぁ、それ言うの何度目やねん…。聞きすぎて耳にタコさんウィンナーできるわ」

「なんやとぉ!?」

貧乏やった俺のことを思ったのか、バトミントンのスポーツ推薦蹴った腹いせに学費を自分でなんとかしろと言われたからか…それもも、アイツの口車に乗せられてなのか。

あれよあれよと言う間に俺らは敷島工業高等学校に進学。

すぐに全国レベルと名高いバレー部に入部した。

けど、待ってたのは想像以上にエグい現実やったわ。

「廃部…？どういうことですか!?」

「言った通りだ、難波。この学校はお前らの年で廃校になり、他の工業高校と合併するんや。つまり、所属している高校がなくなるって訳やな」

「そんな…納得できません!!合併後もバレー部として…」

「合併後は、工業と一般学科共同の学園になる予定や。そこにバレー部は存在せえへん。悪いな、この少子化の波には…部活なんて価値はないのかもしれんな…」

その言葉に陣は何も言えないまま、ただそこで歯を食いしばっていた。

俺らの夢見た春高バレーも、試合も、高校バレーという生活の全てがたった一年足らずで綺麗に消えると言う死刑判決を受けた気分やった。

実力府内トップクラスと言われる敷島工業のレギュラー。
一言で言えば特徴が無いのが特徴ですっていうメンバーやった。
三年間の練習と研鑽で積み上げられた安定感ってのはあったけど、これと言った特徴も、突拍子もない攻撃力も、鉄壁のような防御力もない。平均値が高いチームなだけ。
監督は、二年や三年をやけに気に入ってて、輪に溶け込みやすい手頃なやつをレギュラー入れて試合に出るクセがあった。
一年で、俺や陣が練習でいくらレシーブや、サーブや、誰にも止められへんスパイク決めても、レギュラーになれ、なんて言われた事なかった。
そして迎えた夏の高校バレー予選大会。
順当に勝ち進めた試合。
数年ぶりの全国大会を決めたチームを見てても、腹立つ以外何もあらへんかった。
粗末なレシーブで輪を乱す三年のリベロのプライドの無さにヘドが出るくらいやったわ。

けど、劇的な瞬間はあった。

全国大会一回戦。
宮城の強豪、白鳥沢高校。

試合は一気に持ってかれた。ただ単に平均値が高いチームなんて、圧倒的な個々の攻撃力で成り立つ白鳥沢の足元にも及ばんかった。

けど、あの日。

ピンチサーバーで陣は、初めて全国のコートに立った。

たった1ゲームのサーブ。
たった一打のチャンス。
やけど、アイツは強かった。

サーブで崩し、相手から上がったチャンスボール。三年のセッターがあげる、へボくて高いトスに陣は完璧に合わせた。

そして撃ち抜いたんや。
強豪校の高いブロックを。

誰もが痺れたはずや。
少なくとも、俺らの同期とベンチにいる2年は。せやけど…監督は、陣を入れへんかった。
まぁ、情にほだされたんや。
三年の最後の全国。
思い出を残させるために、下手くそなスパイカーも、クソみたいなリベロも、セッターも。
三年が出されへんかったら可哀想やからって。
学校が合併するからって。
少子化やからって。

そんな大人のどーでもええくだらん理由で、俺らの夏の大会と、公式の高校バレーの日々は敗北で終わった。

「ハル。俺、バレーボールやめへん」

三年の引退式の後、難波と一緒に退部届を出した帰り道で、俺の後ろを歩いていたらアイツはそう言った。

「…なに言ってんねん。敷工から、バレー部無くなるんやで。あったとしても、一年が入ってこん部に未来なんてあるかいな」

新しい血が入らん部に未来なんてない。三年が抜けて、二年と一年で戦えるとしても学校としても廃校が決まってるのだから試合できたとしても、近隣学校の付き合い練習試合しか組んでもらえへん。

そんなお遊びみたいな部に居ても何も面白ないから二人揃ってやめたと言うのに。

「陣。先生も言ってたやろ?お前はタッパもある。バネも、脚力もや。俺はボール拾うことしか能がない。けど、お前ならバレーじゃなくても他の競技で…」

「俺は!!」

後ろにいた陣が大股で歩いてきて、空を見ながら呟いてた俺の首根っこを掴み上げた。振り返って初めてわかった。

陣は泣いてたんや。

悲しいからと違う。

悔し涙やとすぐに分かった。

「俺は、高校生活の三年間を、お前と一緒にバレーへ捧げる覚悟でここに来たんや!!ここでバレーできへんからって辞めてもうたら、もう何もできへん!!バトミントンも野球もテニスも!!」

妥協して始めたもんなんかに情熱なんて注げるか!!アイツはそう言った。アイツが求めてるものは、もうこの学校にはかけらも残ってへん。

そんなこと、俺が一番分かってる…っ!!

「高校卒業してから、あの頃は楽しかったななんて語らうくらいの楽しさなんていらん!!思い出なんかクソ喰らえや!!俺はバレーがしたい!!バレーに捧げるって決めて高校生になったんや!!だから俺はバレー辞めん!!わかったか!!わかったんやったら二度とそんなアホみたいな事を抜かすなアホ!!」

お前と一緒に〝強いバレー〟をしたいから選んだ道や。簡単に諦めれるわけがないやろ。俺も同じや、陣。

『仙石は打つの下手なんやから玉拾い頑張りやぁ』

レシーブしか取り柄がないと内気だった俺。その壁を叩き壊して手を引いてくれたのは間違いなく陣やった。

『俺のスパイクを完全に捉え切れるお前をスーパーレシーバーと言わずに何で呼べばいいんや?』

辛い、苦しい練習の中でそう言ってくれた陣が居てくれたからこそ、俺はアイツと共に高校バレーに捧げようと決めて高校に入った。

高校が廃校になる?

バレー部なんて必要ないから切り捨てる?

少子化？合併？
それがどうした。
その程度のことがどうしたというんや…！

「離せや」

俺の一声で、陣は掴み上げていた俺の襟を離した。

「知ってるしな。お前のそゆとこ」

そうするとも、何となくは予感はしとった。だからこそ、俺も一緒に歩んだるわ。高校バレー男子が高校バレーを捨てた道の行先をな。

「しゃあなしで、付き合ったるわ。俺の高校3年。お前の好きなように付き合わせぇや」

その日から、俺と陣の、たった二人のバレーボールが始まった。

第４話　なにわに降り立つ鴉達

烏野高校バレー部。
二年目の夏休み。

「迷った…」
「あぁ、迷ったな…」

日向と影山は見知らぬ地で迷子となっていた。
とりあえず行き先が分からないので降りた駅。宮城の街並みとは全く違う都会の街並みに圧倒されながら、日向は屋根を支える柱に取り付けられた駅名を見つめた。

「芦…はらばし？」
「読めないからって飛ばすなボケェ!!」

芦原橋（あしはらばし）と読めなかった日向に後ろで苛立ちげに見ていた影山が吠えた。なんと二人がいるのは大阪府の市内、環状線内の駅だった。

「だってしょうがないじゃんかよ！読めないものは!!じゃあ影山くんは読めるんですかー!?」
「あぁ!?ざけんなよ！俺は一人で東京の環状線に乗ったんだからな!!」
「へぇー！じゃあシティーボーイな影山くんなら谷地さんたちがいる梅田までいけるんですねぇー!?へぇー！そうなんですねぇー!?」
「あぁ!?行けるに決まってんだろ!!あれだったら走っていくに決まってんだろ!?」

なんなら改札出て走るか!?とまで発展した言い合いに、芦原橋で降りた地元民が珍しげに目線をやる。ただ、ああいう風に喧嘩している二人組はよくいることなので同様はない。
睨み合う二人ではあったが、同時になった腹の虫の音によって険悪だった空気が一気に萎えた。

「…やめようぜ、影山。無駄にエネルギー消耗するし」
「そういや、新幹線降りてから何も食ってねぇーからな」

仙台から特急で東京。
そして新幹線で新大阪。
新幹線で長距離移動ということにテンションが有頂天となった二人。
綺麗で大きな新大阪駅、そしてどこまでも続くような地下道。意味不明なテンションが赴くままに飛び乗った電車。気がつけば日向たちは一緒に来ていた谷地や月島、山口と離れ離れになっていたのだった。
二人が飛び乗った電車は、目的地方向の逆側の環状線であった。過ぎても過ぎても谷地や先輩たちに教えてもらった目的地に辿り着かないので、ビビった日向に釣られて影山も途中の駅で降りてしまったのだった。

「腹減った…ここどこだろ…」
「知るか」

途方に暮れる二人。
そんな日向たちに向かって歩み寄ってくる人影があった。

「しょぼくれてるなぁ、元気印のちんちくりん」
「なんだとぉ!?おっ…?」

身長のことを言われてムキになりながら振り向いた先。そこには日向も影山も見知った人物があの日と変わらない親しみやすい笑みを浮かべて立っていた。

「よっ、久しぶりやな。日向」

「な、難波さん!?」

偶然、その駅から電車に乗ろうとした難波　陣。日向たちとの再会は実に一年ぶりであった。

▼

「んはははは!!お前それ反対側に飛び乗っとるやんけ!!」

「笑わないでくださいよー」

途方に暮れていた経緯を聞いた難波が大笑いすると、日向は少し恥ずかしそうにそうぼやく。陣も知り合いとの用事が終わり、最寄り駅が芦原橋だったのがまさに奇跡であった。

「んで、待ち合わせ場所はどこなんや?」

「えっと、梅田駅です!」

「梅田駅…やと…」

影山の答えに、思わず神妙な顔つきとなった。首を傾げる日向たちに、陣は大阪府民でも恐る梅田の恐ろしさを語る。

「梅田駅はその昔、迷宮と呼ばれていたダンジョンなんや…」

ＪＲ大阪駅の入り組んだ構造、阪急百貨店やヨドバシカメラ梅田店など、地上の不便さも去ることながら、問題は地下道である。

「地下の入り組んだ通路に入ればもうどこが現在地なのか把握できへん。おまけに目標やったセーブポイントは区画整理で撤去されてる上に、気がついたら新しい地下道も開拓されているというまるで生きた迷宮なんや…」

え？こんな道あったっけ？と思うような道に入ったら最後。西を目指していたのに東に行っていたり、梅田駅を目指していたら北梅田に着いていたり、逆の道を戻ったら北浜に着いていたり…。

梅田の地下街は本当に複雑に入り組んでいる。さっき通ったような道がずっと続いていて、土地勘がない人間が単独で入ろうものなら間違いなく数時間は彷徨うことになるだろう。

分からなかったら近くの人に聞くのが一番早い攻略法。ただし、聞いた人間が土地勘がない人間だった場合はさらに迷う可能性あり。

話を聞いた日向と影山が真っ青が顔をして「都会怖え…地下街怖え…」とぶつぶつと呟いていた。

「まぁ、最近はかなり開拓されたし、魔王城に掛かる橋もできたから、大概なことがない限り迷いはせんから安心し！」

ちなみに魔王城に掛かる橋とはＪＲ大阪駅からヨドバシカメラに新設された橋だったりする。駅を出て目の前に大きな店舗があるのにその行き方がとても複雑だったりしたので府民の一部からそう呼ばれているのだ。

▼

「いやぁー、これは全くもって本当に清々しいほどの間抜けさだねぇ」

拝啓、大阪に行くと言う機会を恵んでくれた皆様。

まさか難波さんと合流しているとは思ってなかった谷地仁花です。
そして隣で逸れて行方不明になっていた日向たちをディスっている月島くんはとてもいい笑顔をしています。

「新大阪から意気揚々と都会に出てきたのはいいけど、どっちに向かうかも分からずに電車に飛び乗った挙句、何駅も駅を彷徨うとは大変な思いをしたんだねぇ」

「一体全体何駅分往復したのかな～？」と煽り口調で言う月島くんの言葉に耐えきれなくなった日向が飛びかかろうとするのを、後ろにいた難波さんがすかさず止めてくれました。

「月島このやろぉぉおお!!」
「日向落ち着け!!」
「影山君も！ステイ！ステイ!?」

青筋を浮かべて詰め寄ろうとしている影山くんは山口くんが止めてくれていました。ようやく合流できたと言うのに相変わらず…と言った感じです。

「なんや、ハルも居たんか？」
「谷地さんからメールがきてな」

難波さんが日向たちと居るとは思ってなかったのですが、こっちはこっちで仙石さんが駆けつけてくれていました。行方がわからない日向たち。パニックになった私はダメ元で一年前に教えてもらったメールアドレスに連絡をしたのですが…。

『日向が！日向が大阪の迷宮に…！』
「居るとこも梅田って言うし、ただ事やないと思って飛んできたんや」
「割と洒落になってないあたり笑えん話やな…」

青い顔をして駆けつけてくれた仙石さんには足を向けて寝ることはできなさそうです。本当に申し訳ないです。

「日向たちは何で大阪に？」

「バレー！」

難波さんと仙石さんの問いかけに、日向と影山くんが切って返すような返事をした。二人が「あー」と言って大きなビルに備え付けられている看板を見上げる。そこには大々的に宣伝されたバレーボールの試合広告が載っていました。

「おー、そっか。今大阪でプロリーグやってるんか」

全国の企業チームが一同に会するプロリーグ。今年の試合場所が大阪だったのです。私たちが宮城から大阪へとやってきたのは、この試合を見るために。

「大会も落ち着きましたし、二年の思い出作りに行ってこいって先輩から」

シルバーウィーク前の部活動のこと。

『このありがたい田中先輩と、ありがたい西谷先輩から後輩たちにチケットのプレゼントだぜ!!』

『お前らは補習で行けないだけだろ』

ビシッとポーズを取って言う田中先輩と西谷先輩の後ろで、縁下先輩が呆れたようにそう言っていた光景を思い出します。きっと今頃、田中先輩たちは血涙を流しながら補習を受けてるんだろうな…。

ちなみにチケットは組織委員会を務めている知り合いから武田先

生経由で譲ってもらいました。

「プロリーグ…！どんな選手がいるんだろうな！強いんだろうな！みんなすげぇーんだろうな！」

最初は先輩たちに申し訳ないと思っていた日向も、今じゃプロリーグの選手たちや試合を見ることで頭がいっぱいの様子だった。私自身も、プロバレーの試合を見るのは初めてで、内心かなりわくわくしていたりする。

「ほんま、清々しいまでにバレー馬鹿やなぁ」

仙石さんの言葉に、月島くんと山口くんがウンウンと頷いている。

「よっしゃ、プロリーグのチケットは明日みたいやし、今晩の飯は俺らが奢ったろう！」

「まじすか!?」

「仙台で助けてもらった礼もあるしな」

大阪の人間は!!尽くしてもらった礼は忘れず!!

「「借りはきっちり返すんや!!」」

ババーン、とキメ顔でいう二人に日向と影山くんがおおーと声を上げた。なんだかノリが田中先輩や西谷先輩たちと通ずるものがあるような…ないような…。

「いや大袈裟すぎでしょ」

「あははは」

呆れる月島くんをよそに、難波さんたちはとりあえず着いておいで

と道案内をしてくれました。

「おすすめの店に連れてってたるから、腹すかしてついてこーい！」

「おぉー!!」

大阪大阪食い倒れー!!たこ焼き！串カツ！お好み焼きぃー!!フッフッフッー!!

すっかり二人のテンションについていく日向は相変わらずコミュ力お化けだし、影山くんもどこかテンションが上がってるのかソワソワしている様子だった。

「元気いっぱいだねぇ、最後まで迷子だったのにさ」

「その割にツッキーも心配してたよね？」

「山口、うるさい」

「ごめん、ツッキー」

拝啓、先輩方。

紆余曲折ありましたが、私たちは無事に大阪観光とバレー観戦ができそうです。

はしゃぐ日向たちの後について行きながら、まだ私はこれから起こる波乱に気付いていませんでした。

第５話　とある高校最強セッターとの因縁

アイツと出会ったんは、中学一年の頃やったわ。

「西陵？知らんなぁ」

中学の一年生大会。
サムの伝えてきた中学は、大阪の西陵中学バレーチームだとか。
なんでも上手いウイングスパイカーがいるんやってさ、とチームメイトも噂をしてたんやけど、俺からしたら聞いたこともない無名。
いくら優秀なスパイカーがいても、そのスパイカーにドンピシャなトスを上げれるセッターがいるか？少なくとも、そんな名の知れたセッターはおれへん。
ま、どーでもええわ。
俺のセットアップとそれを打てるスパイカーがおればなんとでもなるわ。
俺のセットアップで撃たれへんスパイカーは、ただのボンクラやからな。

「ほな、練習再開しよか」

一年生大会は三年や二年のレギュラー関係ない。一年生だけで出れる唯一の公式試合や。聞いたこともない一回戦の相手に躓くなんて勿体なさすぎるやろ。
油断はせえへん。ベストなセットアップで叩き潰して、俺らは二回戦に行く。

その時は俺も、サムも、チームの誰も。
そんな無名のチームなんて眼中になかったわ。

▼

「噂で、大阪の陣って結構有名らしいけど、案外、お利口さんなスパイク打つんやね」

大会当日。

試合前の最終調整の最中に、ネット越しに俺は相手のスパイカーに思わずそう言ってしもうた。

特にパッとしないセッターに上げられたトスを打つ姿を見て、最初に思ったのがそんな感想やった。

大会の会場でも噂になっていたスパイカーがどんなもんかと思って見とったけど、なんかセッターと同じでパッとせえへんというのが第一印象やった。

「ほー、京都の一押しセッター怖っ。近寄らんとこ」

隣にいるリベロのやつが、俺の言葉にそう反応するけど相手は特に反応示さんかった。なんや、割と煽ったけどあんま効果ないんか。おもんな。

サムに呼ばれて俺も挨拶のためにネットから離れた。

「……ハル」

俺は背中を向けてたから気づかんかった。

サムが青ざめた顔で相手コートを見ていたことを。

「よろしくどーぞ」

そのビリビリと伝わるプレッシャーを、俺はすぐに味わうことなった。パッとせえへんっていう印象は一瞬で吹き飛ぶ。

（ここはサイドに振ってブロックをすり抜け…）

いつもと変わらないセットアップ。ボールまでの距離は1個半。理想的なAパス目掛けてトンと地面から離れる。公式試合の効果もあってか、手に触れるボールの感触はいつもよりも研ぎ澄まされてる実感があった。

（いい感じのラインや）

放ったボールはイメージ通りや軌跡を描いてネットに向かってスパイク姿勢になってるスパイカーの手へと吸い込まれる。

そのスパイカーの打つ先は切り開いたノーブロックのコート…のはずだった。

ボールが触れる寸前。切り開いたと思ったはずのネット際に、その男はブロックの手を振り上げて飛んでた。

（なんや…その反応は）

点をもぎ取れるはずのセットアップは、ブロックに阻まれて仕切り直される。ワンタッチで威力が殺されたんや。跳ね上がったボールを相手セッターが再び上げて、こちらに帰ってくる。

大したことない。スパイカーはあいつやなかった。振られた一打をレシーブで捕まえてもう一度セットアップを采配する。

（ちぃ…またっ）

ブロッカーを振り切ったと思ったセットアップは、再び組み上げられたブロックに阻まれた。たった一枚のブロックやと言うのに、信じられへんくらいのプレッシャーを放っとる。

振り切ろうとしても、引き離そうとしても、アイツは折れん。

その時から難波　陣という男は、異質なスパイカーやった。

けど、その本質はただ単にスパイクが上手い奴じゃない。
堅実なリードブロック。そして、強靭なバネが生む対空時間。その最中に僅かなアイコンタクトでスパイカーの狙いと、さらに行けば俺のセットアップの狙いすら読み解く頭の回転の速さ。

「この…っ！」
「チィ…っ!!」

直感…というより、突き詰めたリード（見抜き）と、空中戦で相手が裏を掻こうとすれば即座にゲス（推測）に切り替える思い切りの良さ。
あの時では最高の出来やと確信してたセットアップがプチプチと、ことごとく潰されてゆく。
そして、何本目かのセットアップの時。
ワンタッチで威力を殺していた一打が完全に捉えられた。渾身のセットアップにドシャッとを食らったとき。

「宮兄弟って結構聞く名前やけど、なんていうか…あれやな」

ネット越しにアイツは俺を見ながら小さな声で言った。

お利口さんってやつやな、と。

散々煽り倒した相手にそう言われるとは、微塵も思ってへんかった。
スパイカーが上手くなったと感じるセットアップをするセッターっていう呼び声。それが遠かっていくような気がした。

「へっへ、セットアップへし折った上に、サーブでもバキバキに心折るって容赦ないなぁ、陣」
「ハル、俺を悪者みたいに言うな。あと、下手くそなのが悪い」

結果は惨敗。1セットも奪うこともできずに俺らの一年生公式試合は幕を下ろした。
ああそうや。
あの頃はまだ俺は〝下手くそ〟やった。死ぬほど腹立つし、目を逸らせられへんくらい現実やった。

極め付けは、難波　陣の〝サーブ〟。

ジャンプサーブや、フローターなんていう常識にとらわれない独特なフォームと打ち方。そして威力。
気に入らんけど、何度か真似ようとはした。
けどやり始めてすぐに無理やと気づいた。
あの打ち方、そもそもの〝バレー〟としての土台が違う。アイツの家、親がバトミントンのプロ選手やと後から聞いた。
おそらく、あの打ち方をほんまに小さい頃からずぅーっと刷り込まれていたんやろうな。やから、あれがアイツにとって〝一番威力が乗る打ち方〟なんやろうな。
理屈や理論も吹き飛ばすほどの。

腹立つ。
ムカつく。
何もかもが屈辱で、何もかもが気に入らん。
目つきも、サーブの時の流れも、俺のセットアップを見切ってるあの顔も。
何もかもが癪に触る。

だから、俺はリベンジを誓った。
高校に上がる前にさらに研ぎ澄ますと。
サーブも、セットアップも、その全てを研ぎ澄ます。
二度と、「お利口さん」なんて言われへんほどに。
そして、俺が味わった屈辱を必ず全国の舞台で何十倍返しにしてやろう、と。

けど陣が通うとった高校は、一年から全国に名を出すことは無かった。聞いた話では学校自体が廃校になったとか。
北さんが、社会人チームで陣を見かけたとか言って頼み込んでアイツとバレーをやる時間は作ったけど、なんか違った。
単なる練習。
2対2に、試合のような熱さを感じることは無かった。
それ以来、俺はアイツには会ってへん。

次に会う時があるとしたら。

それは俺がアイツを完膚なきまでにボコボコにする試合の時だけや。